

ユニセフに寄せる心が地元に根付いた

日本ユニセフ協会は本年6月9日に、財団創立58周年を迎えます。その始まりは、女性たちによるボランティア活動。長きにわたる活動の中で、その内容も重要性も大きく変わって来ました。一方で、現在、日本国内25カ所にある日本ユニセフ協会の協定地域組織は、今も熱心なユニセフ支援者であるボランティアの方々によって支えられています。日本ユニセフ協会、そして地域組織第1号の久留米ユニセフ協会の設立に関わった石橋正二郎夫妻と、当時の女性たちのユニセフに対する情熱を久留米ユニセフ協会に語っていただきました。

久留米ユニセフ協会は、久留米市出身の石橋正二郎氏（ブリヂストン株式会社創業者）とご夫人富久氏のご提唱で、1967年に誕生いたしました。当時は『久留米ユニセフ友の会』と呼ばれていました。

石橋氏が、東京にユニセフの支援組織を立ち上げ、その後、故郷久留米に友の会を設立するきっかけは、1953年のヨーロッパ視察にあつたと言います。その年、北海沿岸を襲った嵐でオランダが未曾有の大洪水に見舞われました。オランダで、「ユニセフ救援物資」が各国から運び込まれるのを目撃したとき、「相互扶助の国際愛」にいたく感動されたと言います。帰国後、数人の女性たちと共にユニセフの駐日代表（マルゲリータ・ストレーラー女史）をサポートする活動が始められました。やがてこの

ボランティア組織は、「日本ユニセフ協会」として1955年に財団化されるまでに発展しました。ユニセフに対する支援活動の拠点を東京だけにとどめたくない、特に石橋富久氏が中心となり、1967年に、郷土の久留米市に、「ユニセフ友の会」第1号が設立されました。目的は、地元に根付いたユニセフ支援活動を日本中に広げるためでした。

その活動は、最初のうちは日本国内の孤児たちに対する支援も含まれていました。東京での活動が発展・拡大すると共に、地域での活動も少しずつ変化していきました。今では、ユニセフ・カードの頒布や写真展開催のみならず、学習報告会、地域でのアドボカシー活動までが含まれています。地域での活動は、昔と変わらぬ情熱で、すべてボランティアの方々により支えられています。

「ユニセフから配られた粉ミルクで大きく育った私たち。是非、その恩返しをしたい」という女性たちの思いは、この地に根を下ろし、着実な歩みを続けています。

石橋ご夫妻は、多くの功績を遺されました。が、もっとも大きな無形の遺産、功績は、ユニセフ支援活動そのものであったのではないでしょう。

この貴い遺産を次世代に引き継ぐべくこれからも、久留米ユニセフ協会は、地道な活動を続けていきたいと願っています。

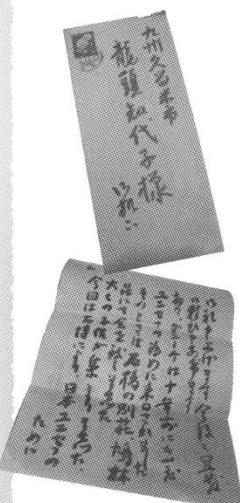
ダニー・ケイ氏と共に。石橋富久氏（右端）と、ひとりおいて龍頭知代子氏と大内初代会長



ダニー・ケイ氏。東京板橋区の整肢療護園の子どもたちと(1961年來日時の写真)



ユニセフと日本ユニセフ協会は、1970年の大阪万博機会に、「ユニセフ万国まつり」と「ユニセフ万国博覧会特別募金」を実施。ユニセフの親善大使第1号であるダニー・ケイ氏（米国俳優、コメディアン）が、より多くの方々にユニセフを知つてもらおうと来日しました。この年、世界から多くの有名人が集まり途上国の子どもたちへの支援を訴えました。呼びかけには、外務省、NHK、万博協会なども全面的に協力。1億円を目標に呼びかけが行われました。学校でのユニセフ募金（10円募金）を呼びかけてきた日本ユニセフ協会としては大転換期。子どもたちだけでなく、一般の人たちからの募金に門戸を開いた初めての出来事となりました。



創立45周年を迎えた久留米ユニセフ協会に寄贈された石橋富久氏からの書簡（一部）

日本ユニセフ協会の協定地域組織は、2013年1月現在25カ所にあります。詳細はホームページをご覧ください。各地域組織の活動も掲載されています。

【日本ユニセフ協会協定地域組織】

http://www.unicef.or.jp/partner/partner_loc2.html